

# ライティングセンターによる ライティング支援のためのルーブリックの開発

小林至道<sup>1</sup> 大原悦子<sup>2</sup> 毛利美穂<sup>1</sup> 飯野朋美<sup>2</sup> 西浦真喜子<sup>1</sup>  
関西大学教育推進部<sup>1</sup> 津田塾大学ライティングセンター<sup>2</sup>

## 1. 問題の所在

近年、日本の大学教育において、さまざまな形で学修評価が試みられている。「ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明する」ルーブリックも学修評価を行うツールのひとつである[1]。従来、ライティングに関するルーブリックは、初年次教育を中心とする教員個人あるいは複数人が共同で作成するというケースが少なくない。この場合、教員の専門性や評価対象とされる学生が書く文章の多様性という点で限界があるのと同時に、そこから汎用的なルーブリックを作成することの難しさがある。これに対して、ライティングセンターにはさまざまな学部、専門性を背景に、各学生が課題を抱えて文章を持参するという特徴がある。こうしたライティングセンターの特質を活かし、学生が抱えるレポート課題に求められる要素や、執筆プロセスにおいて学生が書く文章の段階的な特徴を分析し、そこからより汎用性の高いライティングルーブリックの開発につなげていくというのが、本研究の意図するところである。

他方、ライティングセンターにおける支援では、学生の「気づきを促す」ことを基本理念とすることが主流である[2]。しかし、ここで学生に促される気づきとは具体的に何を指すのか。換言すれば、ライティングセンターは、利用する学生に何を気づかせ、どのようなレポートに到達することが望ましいと考えているのか。これらの点については、ライティングセンターを利用する学生はもとより、学生にその利用を勧める授業担当教員にとっても、明確化が期待される点であろう。こうした背景を踏まえ、本発表は、ライティングセンターを有する両大学が連携のもと開発したルーブリックについて報告するものである。

## 2. ルーブリックの開発体制と手順

### (1) 開発体制

ルーブリックの開発は、関西大学と津田塾大学それぞれのライティングセンターの運営・管理に携わる特任教員5名（関西大学：3名、津田塾大学：2名）で行った。2015年10月から開始し、2週間に1度のペースでTV会議システムを用いて合議の機会を設けた。

### (2) 開発手順

開発は次の2段階で進めた。第1段階は、「ライティングセンターを訪れる学生に求める（期待する）点」と「ライティングセンターにおける支援で大切にしている点」について、両大学の認識の共有をはかることからスタートした。その議論を踏まえ、第2段階はルーブリックの作成に移行した。具体的には、評価観点、評価尺度、記述語の順に両大学が暫定案を出し合い、5名による合議を経て両大学共通のルーブリックを作成していった。

### 3. 開発プロセスにおける論点

今回開発するルーブリックは、従前のライティングルーブリックと比べ、どこが違うのかという点については、開発プロセスにおいて繰り返し議論がなされた。

#### 【論点1】「ライティングセンターのルーブリック」とは何か

ライティングセンターが学生の書く力を支援する施設である以上、ライティングにおいて学生に求めるテクニカルな側面を可視化することが必要であることは言を待たない。それに加えて、「ライティングセンターは、学生の書く力だけをつけさせる場所ではなく、広く学修全般に向けての意識を変える契機としてほしい場所でもある」ことから、学生の意識の変化も視野に入れたルーブリックにすることが望ましいのではないかと議論がなされた。結果的には、以下に示すような変遷を経た評価観点で記述語の具現化を進めた。

	関西大学案	津田塾大学案		折衷案
評価観点	来室目的の明確さ	課題に対する意識	➡	学修への主体性
	書きたいことの明確さ	言葉に対する意識		課題理解力
	情報収集力	プロセスに対する意識		論理的思考力
	文章構成・表記	読み手に対する意識		情報収集・分析力
	コミュニケーション能力			コミュニケーション力

#### 【論点2】「ライティングセンターによる」の意義

この点については、ライティングセンターで大切にしている点が、両大学とも「ライティングにおけるプロセスの支援」であるという共通認識を軸に検討を進めた。結果的に、「ルーブリックの使い方」「尺度間の差異のつけ方」の2点に議論がつながる形となった。

まず、ルーブリックの使い方に関しては、ライティングセンターで支援（セッション）を行うスタッフおよび相談に訪れた学生が、セッションの前後で、学修成果（物）を振り返り、その後のライティング活動の指針とするためという利用場面を想定した。ここではライティングセンターの継続的な利用促進につなげたいという点を考慮し、ルーブリックによる点数化（可否・合否の判別）ではなく、学生の現在地を位置づけ今後の学修指針を示すといった「学修促進」に力点を置くことを重視することとした。

続いて、尺度間の差異のつけ方に関しては、ライティングプロセスにおいて「学生が実際にどのようなことをするのか」を考慮した[1]。言い換えれば、学生はどのような支援を必要とする文章を持参してライティングセンターに訪れるのか、という点に関する検討を行った。具体的には、ライティングセンターを利用した学生が持参した文章を分析対象とし、その特徴を尺度間のグラデーション（差異化）をつける局面で活かした。

### 4. 今後の課題

今後は、上記のプロセスを経て開発したルーブリックを、実際にライティングセンターにおいて利用し、その使用感を質問紙やインタビュー調査によって検証する必要がある。その結果を踏まえ、ルーブリックのブラッシュアップを重ねていかなければならない。

### 参考文献

- [1]ダレル・スティーブンス、アントニア・レビ著（佐藤浩章監訳）『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部、2014年、p.2、p.7.
- [2]佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房、2013年、pp.2-10.